

物語における論理的な思考力を育てるための指導の工夫
～「逆思考読み」で因果関係を捉える～

妙高市立新井小学校
歌川 浩一郎

1 目指す子どもの姿

物語は、子どもたちの想像を豊かに広げ、楽しさを味わうことができる。しかし、授業において自ら課題をもち、学習に臨む子どもたちはどれほどいるのであろうか。また、読み取り後、読解のための方法を子どもたちはどれほど身に付けることができているのであろうか。読解力の向上が求められる現在、国語科においても、論理的に考える力の育成と方法の確立が重要であると考えます。

そこで、国語における論理的な思考力「①言い替える力②つなげる力③まとめる力」と捉える。特に物語では、中心人物の因果関係をつかむことが大切だと考える。これは②つなげる力の育成につながる。また、この力を育てる方法として、「逆思考読み」という読み取り方法を活用し、論理的な思考を育てる方法を子どもたちに定着させる。こうすることで、常に自らの課題をもちながら、中心人物の心情の変化を読み取ることができる子どもの姿を目指す。

2 具体的な手立てと子どもの変容

「逆思考読み」とは、最初の中心人物の状態をはじめの項目としノートの始めに書き、最後の状態をうしろの項目として、ノートの最後を書く。うしろの項目から疑問を作り、答えを導く、そして答えから疑問を作り、答えるという作業を繰り返し行い、はじめの項目につなげる。こうすることで、物語の因果関係を読み取るという読解方法である。

(1) 具体的な手立て

単元：「大造じいさんとガン」（光村図書5年生）

- ① 文章の内容を1文で要約する。
- ② 逆思考読みの方法の指導。
- ③ 個人で逆思考読みでの読み取り。
- ④ 関わり合いを用いての逆思考読み。
- ⑤ 再度文章の内容を一文で要約する。

(2) 実践と子どもの変容

- ① 初めて文章を読んだ後、子どもたちに内容を一文で要約させた。これは、「逆思考読み」を通して中心人物が何によって心情が変化したかしっかりと読み取ることが出来たか、見取るためである。まとめ方は、「○○（中心人物）が□□（要因）によって、△△（心情の変化）になる話」とした。結果は下記の通りである。

子どもがまとめた内容	人数（全26名）
大造じいさんが、残雪の頭領としての姿を見て、堂々と戦おうと気持ちをもつ話	12人
残雪が、怪我をして、大造じいさんに手当をしてもらう話	8人
大造じいさんが、残雪をいまいましく思い、捕まえようとする話	6人

- ② 「逆思考読み」を始めるに当たり、学習の仕方について共通理解を図った。昨年度の実践の反省を生かし、項目を8つ立てた。反省を生かした点は⑤から⑧である。①から④までの内容で読み取りを行うと、話が脱線していく確立が高く、始めの柱にたどりつけなかったからである。

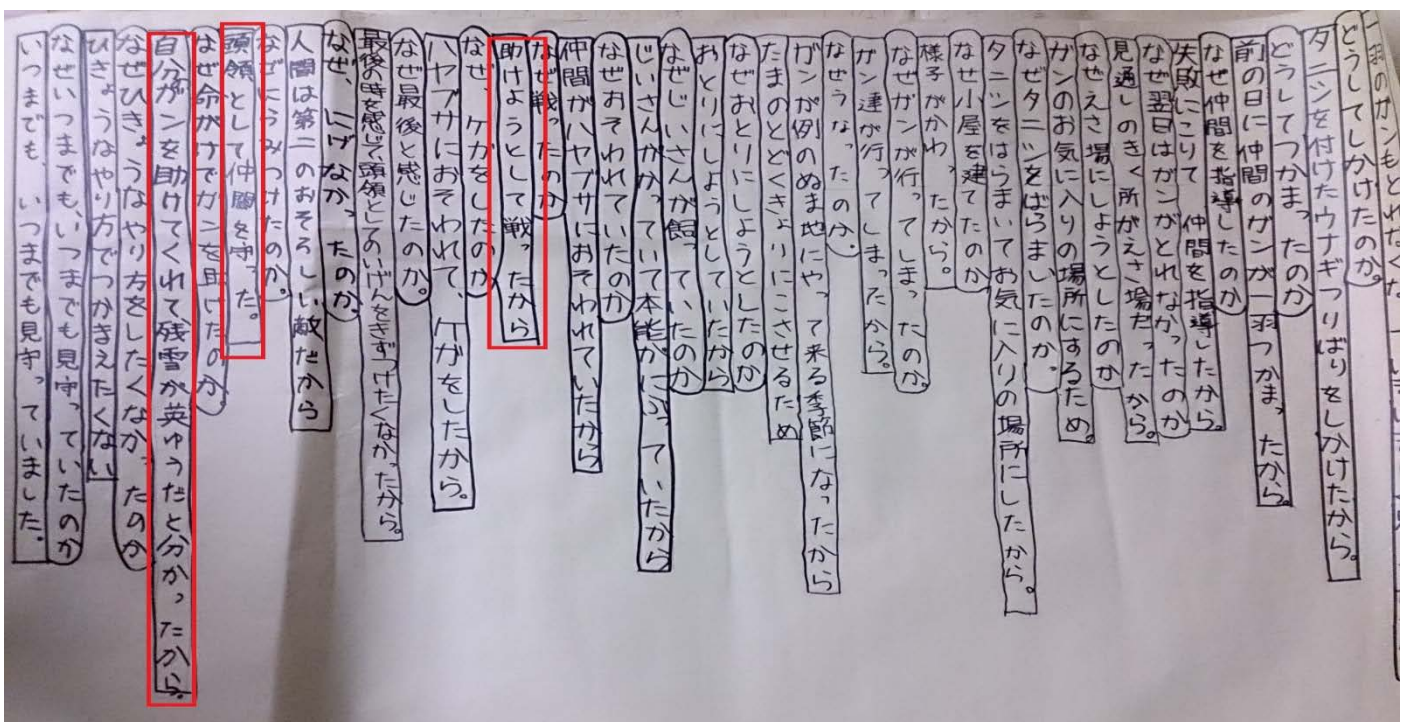
- ① 物語の2本の柱をつくる。
- ② 「どうして」「なぜ」「どのように」という言葉を使って疑問を作る。
- ③ 疑問の限度は、1～3個
- ④ 全ての疑問に対する答えを見つける。
- ⑤ 疑問を作る際は、答えの文章をそのまま使用する
- ⑥ 答えは、「〇〇したから」「△△と思ったから」とする。
- ⑦ 答えを探す際は、疑問の文章の近くから順番に探す。
- ⑧ 答えが導き出せないときは、言葉を変えて、疑問作りを再度行う。

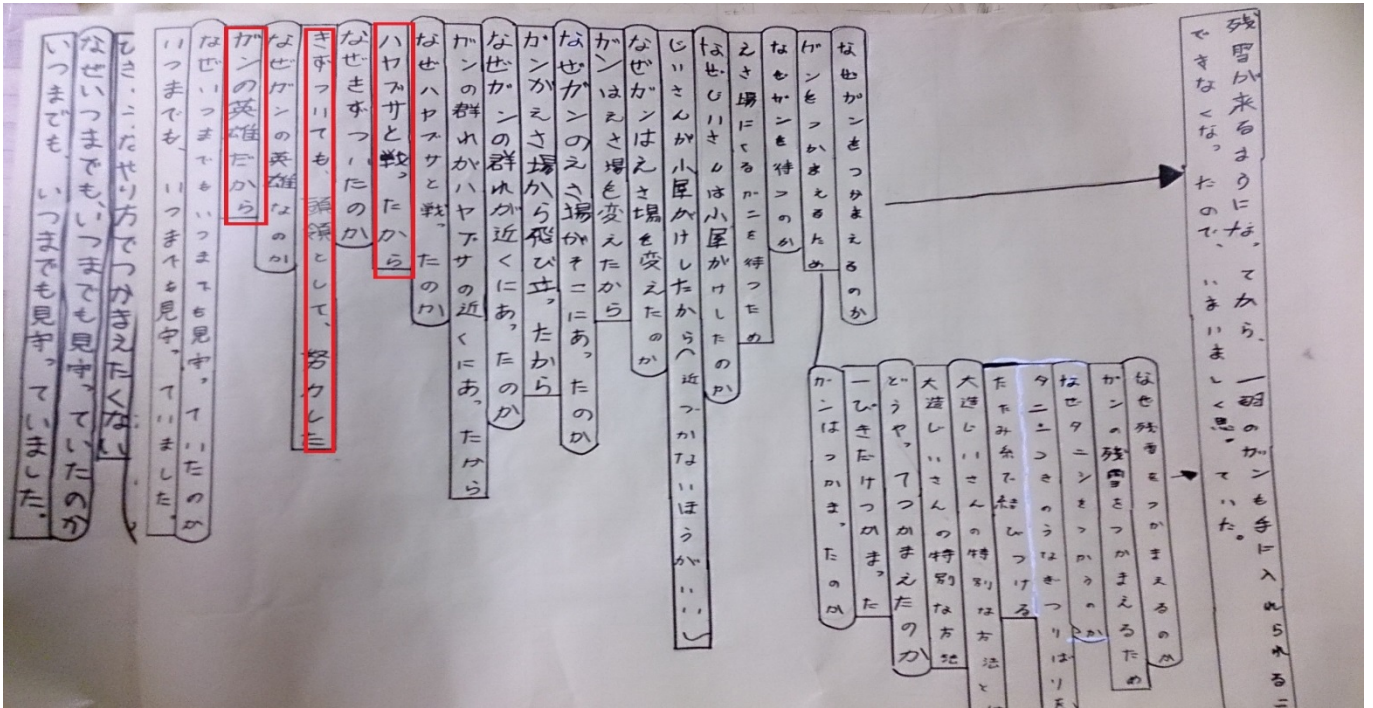
- ③ 「逆思考読み」を個人で行った。初めてということもあり、始めと後ろの柱は、学級全体で決定した。始めの柱を作ると子どもから、「なんで始めはいまいまいしく思っていたのに、最後では、いつまでも見送っているの。」という声が子どもから上がった。この姿は、物語に対して自ら課題をもつことができたことを表していると捉える。

その後、疑問を作らせながら、個人で読み取りを行わせた。始めは戸惑う子も見られたが、徐々に方法に慣れてくると、次へ次へと疑問を作り、答えを探そうとする子どもの姿が多く見られた。昨年度の実践の反省を生かしたことで、文章から答えを見つけ出すポイントが絞れ、読み取りを苦手とする子どもも、少しずつではあるが自ら学習に取り組む姿が見られた。

- ④ 「逆思考読み」の第2段階として、4人の班で意見を交流させ、模造紙に物語の因果関係をまとめさせた。これは、疑問がつかならなかった子どもに対して友達の意見を聞くことで次へと学習を進めるヒントとなるようにすることや、自分では気付かなかった因果関係の新たな視点を発見することをねらいとしている。子どもたちは、それぞれに自分と友達のノートを見比べたり、話し合ったりしながら、始めの柱へとつなげてまとめることができた。

第3段階として、まとめたものを全て黒板に掲示をし、共通点はどんなところか確認をした。





共通点を見つけ出すことで、この物語の中で中心人物の心情の変化の重要な要因を確認することができた。また、全ての班に共通したことは、上記の写真の赤枠の部分である。この部分は、中心人物の心情の変化のクライマックス場面でもある。この共通点を探す活動により、子どもたち自身で心情の変化の最大の要因を見つけ出すことができた。

- ⑤ 「逆思考読み」を行った後、子どもたちに再度物語の内容を一文で要約させた。結果は、下記の通りである。

子どもがまとめた内容	人数 (全26名)
大造じいさんが、残雪の頭領としての姿を見て、堂々と戦おうと気持ちをもつ話	23人
残雪が、怪我をして、大造じいさんに手当をしてもらう話	3人
大造じいさんが、残雪をいまいましく思い、捕まえようとする話	0人

3 成果と課題

成果

- ・「逆思考読み」を行うことで、物語に対して課題をもちながら読もうとする子どもや始めの柱につながるために答えや疑問を練りながら考えようとする子どもの姿が多く見られた。これは、目指す子どもの姿の一つを達成できたことの表れであると捉える。
- ・班や全体でかかわり合いながら中心人物の心情の変化の要因考えることで、クライマックス場면을絞ることができた。上記の⑤の結果からも「逆思考読み」を行い、全体で共通理解を図ることで、物語の学習前後での要約の変化に大きな違いが出た。これらの結果から、物語の要約に「逆思考読み」が有効であると捉える。

課題

- ・「逆思考読み」を個人、班、全体とステップを踏みながら行ってきたが、学習時間に膨大な時間がかかった。成果は大きいですが、効率のよい方法を確立することが必要である。
- ・少人数であるが、共通理解を図っても、読み取りの前後での要約での変化がない子どもが見られた。物語とは、中心人物の心情が必ず変わるということを意識させてまとめさせる必要がある。

